

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 三浦 倫平

本論文は、社会学が基本的な主題としてきた人間の社会的な「共生」という原問題を見すえつつ、都市社会学の現代的・方法的な課題を論じたものである。1980年代の「新都市社会学」の理論的・学説史的研究と、都市計画としての「下北沢再開発」をめぐる経験的・実証的な地域社会運動の研究という、二つの領域を中心に構成されている。ただし理論の応用・検証として調査研究を位置づけるという多数派の論文形式とは異なり、都市社会をめぐる理論的な認識枠組みも、フィールド調査の成果としての地域社会分析も、社会的な知が生産した認識として等しく方法論的検討の対象とするという点に、都市社会学の再構築に対する筆者の野心的な構えがある。

序章において、社会学はいかに共生という主題を扱ってきたかを、とりわけ都市という場にしばって論じ、この論文が取り組むのが空間の都市性と公共性との重なりあう領域において生みだされた問題であることを明らかにしている。第1章では、共生のテーマを「都市空間の危機」すなわち排除／均質化／荒廃化の現れとして捉え直し、1980年代の新都市社会学が論じてきた諸概念と丹念につきあわせて検討している。そこで浮かびあがってきた「理論的対象の喪失」という課題を引き受ける形で展開する第2章では、シカゴ学派に遡る都市社会学の方法を検討するなかで、複層的な意味世界をいかに把握するかをめぐる、社会運動論・住民運動論の理論的な遺産を精査し、ルフェーブルの空間論の再評価を試みた。これまで人間関係や集団の問題として解釈される傾向が強かった社会学における共生の分析を、空間と社会とが絡み合う意味世界のレベルで捉え直した点は独創的である。続く第3章以降では、2000年代になって注目されるようになった下北沢地域の都市計画をめぐる紛争を素材に、前章で論じてきた共生の都市社会学の方法論的な枠組みを敷衍し、計画推進側と反対運動側の双方の共生の構想を、その論理や意味世界の複層性に着目しながら分析している。第4章では下北沢の発展の歴史をたどりつつ、それらの意味世界を支える社会的・空間的な関係性を明らかにし、第5章では2000年代以降の下北沢の反対運動における地域社会の構想のありかたを探っていく。序章や第1章で論じた公共性論者たちの枠組みを意識しつつ、裁判闘争や抗議活動として繰り広げられた実態を、対抗型・連帯型・イベント型の三つに類型化して、「都市への権利」に基づく共生のあらわれとして分析している。第6章は、以上の分析を総括して、この論文が構築しようとした「共生の都市社会学」の方法論的な意義を整理している。

本論文は、まだ構成において荒削りなところが残るとはいえ、調査研究の実践を支える社会的想像力への真摯な取り組みであり、シカゴ学派以来の都市社会学の蓄積の再検討と長く関わってきた地域社会研究の実践とを組み合わせることで初めて達成できた、社会学の意欲的な研究である。本審査委員会は、博士(社会学)の学位を授与するにふさわしいものと判断した。